

オーバビーさんと行く沖縄平和の旅 2007年6月22日(金)～24日(日)

報告 筒井百合子

撮影 河合利秀・筒井百合子

チャールズ・オーバビーさん(米国第9条の会創始者)との最初の出会いは、2005年4月の豊中市民会館での「九条の会・豊中いちばん星」結成集いにメッセージを贈っていただいたことから始まります。2年後の2007年5月26日、関西大学での講演会で初めてお会いし、オーバビーさんの9条への熱い思いとひたむきさに感銘を受けました。その後全国を講演で回られ、6月22日、沖縄那覇空港で再会しました。



1ヶ月ぶりに会うオーバビーさんは、大きなリュックを背負って、お元気そのもの！とても81歳とは思えません。

上の写真中央はこのツアーのコーディネーター樋口義博さん(フリースクール「のむぎ」校長)。他のメンバーは主に名古屋で平和活動をしている人たちです。9人でレンタカーに乗り込んで、いざ出発！



那覇から北上、途中「安保の見える丘」(道の駅かでな)から嘉手納空軍基地を見る。オーバビーさんは27歳のとき、空軍パイロットとしてこの飛行場から朝鮮半島を空爆するために3日に一度飛び立っていました。

■読谷村■ 6月22日（金）

読谷村（ヨミタンソン）では、反基地運動や平和教育を推進している教育委員会の小橋川清弘さんが出迎えてくれました。

読谷村には悪名高き「グリーンベレー」という米軍諜報部隊の基地があり、軍事演習は基地から出て市街地でも繰り返されていました。読谷村では村役場や小学校を基地内に作って土地を住民に取り戻す努力をし、昨年返還させることに成功しました。

役場の入り口に憲法 9 条が刻まれたモニュメントがあります。これは山内徳信さんが村長のときに建てられたものです。



読谷村役場のすぐ前の道路沿いで金城実さんの彫刻作品展が開かれていました。その大きさ、力強さ、荒々しさに圧倒されましたが、中でも「集団自決」の様子を再現した作品の前では、その悲惨な光景に言葉を失いました。後で知ったのですが、金城さんの母親と3人の姉妹は、この近くのチビチリガマの中で命を絶たれたとのこと。62年を経ても抑えきれない怒りがこの作品群を生み出す源になっているようです。





金城実さんとオーバビーさん



人間の大きさと比べるといかに大きな作品かがわかります。後ろの赤い屋根は読谷村役場



小橋川さんの案内で「チビチリガマ」を訪ねました。ここでは逃げ込んだ140人のうち83人が「集団自決」し、その6割が18歳以下の子どもでした。以前は誰でも中に入れましたが、1995年以降は遺族会の意思で立ち入り禁止になっています。入り口の慰霊碑は、日本軍の自決命令を否定する右翼によって一度破壊されましたが、その後全国からの寄付金によって再建されました。これも金城実さんの作品です。



■米須地区■ 6月23日(土)「慰霊の日」

牛島司令官が自殺した1945年6月23日をもって沖縄の組織的な戦闘は終結したと言われていいますが、実際には「最後の一人まで戦え、捕虜になるな」という指令を撤回しなかったため、生き残った人々の突撃や集団自殺は9月中旬まで続きました。

私たちは政府主催の慰霊祭の行われる摩文仁の丘へは行かず、その少し西の米須地区を歩きました。この辺りには一家全滅で所有者のなくなった空き地が点在しています。普通持ち主のなくなった土地は自治体に接収されますが、戦争の悲惨さを伝える場所として

近隣の人たちによって小さな祠が建てられ、周囲はお花畑になっていました。



ひめゆりの塔の近くの「魂魄の塔」には、沢山の人々が慰霊に訪れていました。「魂魄(こんぱく)」とは死者の魂を意味します。戦後この地域に足を踏み入れた人たちは、あまりの遺体の多さから、この場所に積み上げてそのまま骨塚を作りました。3万5千人がここに眠っています。昭和54年に国立戦没者墓苑に「分骨」されたと記されていますが・・・聞くとところによると、遺族や住民が反対したにもかかわらず遺骨が掘り出され移されてしまったそうです。

安倍首相もここに来て手を合わせれば、沖縄の人の気持ちも少しは変わるでしょうに。



この日、南へ行く道には、戦没者慰霊祭へ向かう観光バスや平和行進の列が連なっていました。菊の御紋入りの〇〇遺族会の旗も目立ちます。

安倍首相の来訪に抗議する市民グループのデモは見たところ30名ほど。それに対して大勢の物々しい警備が取り囲んでいました。



塔の後ろ側には「盗掘」の跡が・・・

■辺野古■ 6月23日

午後は辺野古の海上基地建設予定地を訪ねました。出迎えてくれたのはヘリ基地反対協議会代表の安次富浩さん。毎日のようにここに来て政府側（防衛施設局）の動きを見張り、いざという時にはすぐ無線で連絡、仲間がカヌーに乗って作業を阻止するという抗議行動を繰り返しています。

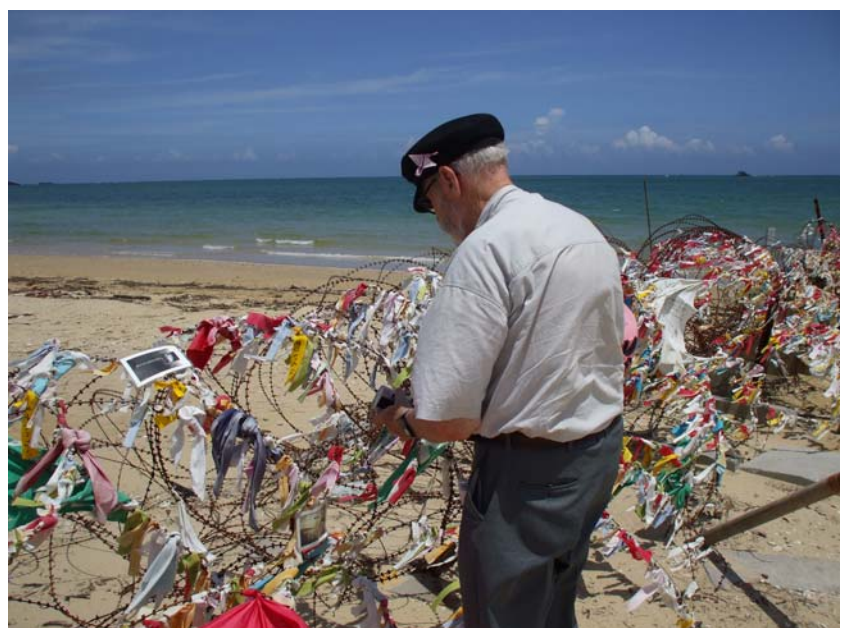
ジュゴンや珊瑚など多くの生物が住む豊かな海を埋め立てて2千メートルの滑走路を作るとは・・・
「ここには軍事基地でなく、世界の人が集まる海洋自然保護センターを作りたい」 沖縄の自然を愛する人たちの願いです。

この運動は「ジュゴンの海を守ろう」という国際的なジュゴン保護キャンペーンとも連動しています。海外からの応援も得て、もし軍事より環境保護が優先されるという結果になれば画期的なことです。



キャンプシュワブとの境界に張りめぐらされた鉄条網には全国からの支援者のメッセージが巻きつけられています。オーバビーさんも折鶴を結びつけていました。

抗議運動をする人たちの「詰所」の小屋。訪問者のために写真や資料を展示し、ジュゴングッズなども販売しています。



■伊江島■6月23日

ものすごいスクールに追われて辺野古を後にし、本部港から潮風に吹かれて1時間、伊江島へ。この島は、戦争中は日本軍の飛行場として、戦後は米軍基地として占領され続けました。本島ではできないような危険な訓練（核模擬爆弾投下演習など）が実施され、それにとまなう事件や事故も相次いでいます。

船から下りると緑豊かなのどかな風景が広がっていました。花と緑に囲まれた「やすらぎの家」では、“反戦おばあ”謝花（ジャハナ）悦子さんの笑顔が待っていました。



隣接する「反戦平和資料館・ヌチドツタカラ(命こそ宝)の家」は反戦農民のリーダー、故 阿波根 昌鴻(あはごん しょうこう)さんの手作りの資料館。沖縄戦や反基地闘争の現実を伝えるための克明な記録やおびたしい数の資料が展示されており一歩入ると圧倒されます。展示物は自由に触ることができます。

展示物とともに様々なアピールも掲げられており、阿波根さんらの叫びが伝わってきます。「ゲンバクを落とした国より落とさせた国の罪は重い」「命を育む土地を、人殺しの練習のためには使わせない」「大切なのは、命・自然・地球を守ることです」



やすらぎの家には、島根県の高校生が
修学旅行で平和学習に来ていました。



地元で「生協」と呼ばれて
いる建物。2階に私たち、3
階に高校生が泊りました。「伊江島へ平和を学び
に来る人は、いつでも泊ま
ってください」と 謝花さん。



農地返還闘争の拠点「団結小屋」



夜は畳の上で「ゆんたく」。こんなディスカッションは
生まれて初めてとオーバビーさん大感激。

五本の指は仲良く
助け合って共に働く
指は学びませう
一九九五年三月一日
阿波根あぐ

阿波根昌鴻さん(1903年～2002年)

晩年には車椅子に乗り目も見えなくな
っていましたが、来訪者があれば必
ず自分で出ていき、体験談を話しま
した。宗教・政党・国籍など一切こだわ
らず、特に子どもや若者に平和憲法
の大切さを伝えることが大きな喜びで
した。



「平和憲法を世界中に広め、地球上から武器も戦争もなくしてしまう。そして、資源や富をすべての人々で平等に分け合い、それぞれの能力に応じて働き、必要なものを必要なだけ、感謝の気持ちで受け取れるような社会になるまで、私たちの平和運動は続けるのです。」

おわりに <オーバビーさん若返る>

別れ際、那覇の空港でオーバビーさん曰く、「この日本ツアーで20歳若返ったよ、今私は61歳だよ！(笑)」
実際その言葉どおり、多くの人に会うほど、あちこちで交流すればするほど、どんどん元気になっていく不思議な
人でした。年齢なんて関係ない。オーバビーさんを励まさなきゃ、と思っていた自分自身が逆にエネルギーをいた
だきました。これからもアメリカで益々パワフルに9条を発信されることでしょう。

初めて訪れる沖縄は、普通のツアーで行く所には行かず、行かない所に行くという少々(かなり?)マニアック
な内容でしたが、こうして振り返ってみると実に面白く有意義な3日間でした。

最後に、伊江島「やすらぎの家」の謝花悦子さんからいただいたメッセージを。「沖縄にこそ9条が必要なん
です。どうか一人でも多くの人に9条の大切さを伝えてください。一緒に9条を守るためにがんばりましょう！」
もし9条が変えられて日本に軍隊が復活したら・・・日本軍の恐ろしさを身をもって体験した沖縄からの声です。